

箋の残りの部分に「別送した 曲水九月号、少女の花九月号 二部」と記し、日付がない。後略の部分に「近々日(二十日頃)浜名湖弁天島まで出かける。今年は海に親む折をみうしなつた」とある。

(文中「先日ラジオ放送で児童の時に兄さんの童謡を全部 やつてくれた」云々とあるが、当時の放送番組を見ると、7月17日(金)午後2時40分「童謡いろいろ」というのがあつて、放送曲目は不明だが、作曲伴奏中山晋平、合唱楠清子、松浦静子、船越光子、鈴木かな子と記載されている。又別に、中山晋平作曲目録年譜によると、「雀たづねて」の頃に「大正十四年七月放送」とあり、同年譜の大正14年記事に、「七月には『童謡いろいろ』という番組でJ O A Kに初めて放送出演して、楠清子ほか三名の児童たちの歌う自作童謡の伴奏をつとめた」とあるので、亮之助の聴いた放送はこの番組と考えられる。厚一の死後2か月たらずであり、中山晋平は追悼の意をこめて自作品から厚作詞のものを選んだものであろう。) (なお、文中にある60枚ほどの戯曲「日南の家」は所在不明。「少女の花」9月号というのも厚の作品が掲載されている可能性があるが未見。)

思ひ出の兄

海野 烏喙子

子等と来て岬の草を摘みにけり

兄は小さな時から余り家に執着を持たなかつた。田舎の小学校を終へると直ぐ町に出て、或る外人の家にゐて中学時代の五年間を送つた。十九の時上京して以来数度しか帰省しなかつた。

膝元に居て親に親しむことは、外の弟妹達にくらべて余り持たなかつた。少年時代から一人かけ離れて居て、大変大人びてゐた。それでゐて寂しがりやの方であつた。

「己が死んだら密葬にして呉れ、親、弟妹だけで……」

そんな事も言つた。

「花を欲しいな」

兄の口癖であつた。

「この秋はいい種を蒔いてやらう。」

秋の花園を思ひ出しては、雁来紅を賞めて居た。一昨年の秋、始めて蒔いた雁来紅が、生へて八寸位になつた頃、通りすがりの子供等に見付けられて、踏みにじられてしまつた。

「児童こどもに合つちあ……」

別段腹も立てない。笑つてしまふ風であつた。子供が好きであつた。中学時代外人の家に居た時、一人娘のメリーさんに貸した学帽を溝の中に捨てられたが、別に怒らなかつた。それを見た彼女の父は烈しく叱つた。それを見てゐた兄の瞳には涙が滲んでゐた。

先年修善寺の温泉に宿つてゐた間子供と親しんだ。写真を幾枚も撮つてやつた。毎日のやうに暗室に閉ぢ籠つたものだった。子供達と別れを惜んでは、色紙へ童謡などを認めて贈つた。

子供への心を小説や童謡に托して子供の雑誌に発表してゐた。殊に少年に対する心持ちには涙ぐまされるものが多かつた。

春くるる鐘や小さき魂一つ